
傘で始める魔物退治

織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傘で始める魔物退治

【Zマーク】

Z0296M

【作者名】

織

【あらすじ】

「魔王と共に戦ってください」「・・・はい？」

パーティーは勇者と魔王とお姫様?どこにでもいる普通の高校生、高瀬光が魔王ともに異世界で傘を片手に魔物を倒す・・・はずのファンタジー&gt;コメディー小話。小説では、きっとない。ちょいっとしたアホ話をあなたに。

0 本目 異世界に招かれて、俺

「魔王と共に戦つていただきます。」

「……はい？」

突然だが、冒険ファンタジー小説を読んだことがあるだろうか？ハードカバーでもライトノベルでも何でも良い。ちなみに俺場合は後者だが。勇者が魔王を倒す。まあ、王道だろう。しかし、あのあたりなのに何故か楽しめてしまう、おそらく無くなる事はないであろう神ジャンル。俺は大好きだね。……読んでる分には。

なんでこんな話してんのかって？

よくぞ聞いてくれた。実は、……巻き込まれちまつたんだよお

おおーーー！

あー、あきたりだから経緯をダイジェスト版でお送りするとだな・

・

俺の名前は、高瀬 光。

公立高校に通う2年生。学力、容姿ともに平凡。身長170。きっとどこにでもいるであろう普通の高校生。そんな俺がいつも通り学校から帰ったところ、ポストに怪しげな手紙を発見、開封した瞬間、手紙から出た光に飲み込まれてしまつたのだった。

「……」

様

「 者様」

・・・・ん、なんだ？何が起きたんだ？徐々に回復する視界。

「 ジー・・・・は？」

最初に目に入ったのは色とりどりの光と綺麗な女の子。

歳は俺と同じ位だろうか？陶器のような白い肌。大きくぱっちりとした瞳は、知性の輝きを燈している。

そして長い銀髪は絹のようで、彼女の着ているドレスと良くマッチしている。大聖堂のステンドグラスの様な窓から入る光に照らされている彼女は魅力的で、お話に出てくるお姫様のようだった。

「お気つきになられましたか？」

お姫様が話し掛けてくる。それと同時に思考も回復して・・・・

「ようこそいらっしゃいまし」

「えええつ？何処だよここ！――！」

お姫さんみたいな人がなんか言っているようだが、正直それどころじゃない。

まず驚愕。当たり前だ。何せさつきまで家にいたんだからな。

「よつこりやこりや」 「つか、あんた誰だよー。どうなってんだよー。」

「よつこり」「まさか死んだのか?…まじかよーまだワールドカップ見てねーんだぞー・・・ぐおつ?…」

一人でテンパっている時だつた。突然身体が浮かび上がつた。そして首には冷たい感覚。

「なんだよーつてヒイイイー!」

何と俺を持ち上げて下さつているのはいかにも中世の騎士的なお方だつた。しかもじー寧に首筋に剣を突き付けなさつている。

「・・・・お話を聞いて下せこますでしょうか?」

微笑みながら話かけてくるお姫さん。田が笑つてない様に見えるのは氣のせいでは無いだろつ。正直、口ワクイ。

「す、すみませんでしたあつー。」

余りの怖さについて反射的に謝る俺。我ながら情けない。その様子に満足したのか、お姫さんは話し始めた。

「それでは、改めてまして。よつこりやらしゃいました、勇者様。私はシャルロット・ファン・カームレイン。ここ、パスタリア王国の姫でござります。」

そう言って、ふわりと笑つ。やっぱり姫だったのか。まあかなりの美人だし、高そうなドレス着てるし、だいたい予想はついたが。・・

・・ん？ 勇者？

「勇者？ 僕が？ どうこいつ」と？」

「はい。実は数ヶ月前、魔王が“魔獸増殖炉”という魔物を無限に生み出す炉を作りました。そのせいで今まで少なかつた魔物の数は急激に増加しています。今はまだ凌ぐことが出来ますが、早く手を打たねばなりません。そこで過去の文献にあつた召喚魔法を執り行つたのです。」

「マジかよー夢じゃねーのかよー」

「はー、夢ではありますん。」

なるほど。何と無くだが展開が読めてきたぞ。テンパつたからか驚きなんでもうどつかいくつちました。

「だから異世界の俺が喚ばれたって訳か。」

「御明察です。まあこんなヘタレが来るとは思いませんでしたが。」

「容赦ないなアンタ……」

てか姫さまがヘタレとか言つていいのかよー

「まあ良い、つてことは俺は魔王をぶつ飛ばして増殖を止めればいいんだな？」

「いえ。魔王を倒す必要はありません。魔王は味方ですから」

・・・・ナンダツテ?

この姫さんは何を言つてこるのであるつか。

「まあ、驚くのも無理はありませんね。訳をお話しましょう。」

やつ語つて姫さん衝撃的な事を話し始めるのだった。

1本目 そして魔王は馬鹿だった。

「まずは魔王についてから話す必要がありますね。まあ、魔王と言つても今回の魔王は自称です。」

「自称つ？！なんだそれ？！」

「私達も良く把握してはいないのですが半年ほど前、ここから北にあるランビエ山脈で大きな爆発が起こり、それと共に突如魔王と名乗る者が現れました。」

えー・・・・。それはただの変人じやないのか？

「それから、さつきもお話しました“魔獸増殖炉”を作ったのですが、その後直ぐにパスタリアに投降してきました。」

「なんで？」

「それがなんでも虫系の魔物が苦手らしく、生まれてきた魔物に追いかけ回されていたら炉に近付けなくなってしまったと・・・・。」

それって・・・・、

「バカだ！バカ過ぎるつー！だいたい虫系嫌いって何？！魔王なのに？しかも戻れないって。そりやもうバカ通り越してアホだろ！！」

「人の事をアホだの馬鹿だの、全く最近の勇者殿は口が悪いの」

そういうながら突然出て来たのは、身の丈180はあるつかといふ、全身を黒い鎧でフルコーティングした巨体だった。

「ぬああつ！なんだお前！」

「何とは失礼な。我こそそなた達が話していた魔王であると言つのに。」

なんと御本人様が登場。よくこの話の流れで出て来られたな。やはりバカなのだろうか。

「ああデルフ、丁度良いところにきました。大筋は話しておきましたから、後はあなたが説明をして下さい。」

と鎧野郎に話を促す姫さん。

「うむ。我は魔王。名はデルフリンクガー。少々呼びづらい故デルフと呼んで貰いたい。」

待て、落ち着け、俺。今はツッコミより情報収拾の方が大事だ。

「・・・分かった。じゃあデルフ。一つ聞くが、何で増殖炉なんぞ造った？」

「ふむ。我の住家はランビエ山脈に有る故、周りに人などおらんでな。」

「ふむふむ。だから？」

「何か大きな出来事など起こせば人も寄つ来よつと思ひてな。」

・・・・・静寂。

しょーもねえええ！！！！

「姫さんっ！……増殖炉より先にコイツどいうにかしるよ……コイツ絶対バグつてるつてええ！」何寂しいからつて気軽に世界の滅亡招いてやがる！！

「はあ、しかしデルフは魔王と名乗るだけあって大きな力を持つています。だからパスタリア王国は、増殖炉を破壊する事と引き換えに処刑を取り消すと言つ声明を出しました。」

と苦笑いの姫さん。

「やうこりん」と

分かつたか。と言つよつてソーフンツと鼻を鳴らすデルフ。確定、コイツは大バカだ。

「ならその力でさつあとぶつ壊せよー。」

「たわけつ！出来たらやつておるわ！我の力は強大ではあるが全ての制御は出来ぬのだ。」

うわ、バカに「たわけつ！」て言われちつたよ。何だろ。すげえ哀

しー。

はあ~~~~。もつ溜息しかでねーよ。これからどうなんだよ。

2本目 鏡と勇者と傘

「ところで、全部終わったら俺は元の世界へ帰れるのか？」

と姫さんに聞いてみる。

まあ大体帰れないってのがテンプレだけじゃ。一応・・・・な?まだやり残した事あるしさ。

「はい。大丈夫ですよ」

当然の様に話す姫さん。

俺にとつては予想外の「」返事。

「マジで?!!ホントに帰れんの?!!」

「ええ、ただ場所と年代は指定出来ませんが。」

「一番大事な所だよソレ!!--変な所に飛ばされたらどうすんの?!!」

新手の詐欺師かテメーはー送られた時代が世紀末だったりどうする氣だ。ケ○シロウとかラ○ウとなんてお近づきなんかなりたくないよー

「まあ、本音を言えば勇者様がどうなうつと余り私達は困らないのですが」

わあ。この女ぶつちやけちゃったよ。

「ホントあなた良い性格してるなーーー！」

本当にコイツは姫なのだろうか。

「くだらん話はそれくらいにして、そろそろ本題に入つた方が良いのではないか？シャルロット。」

と俺の叫びをスルーしてシャルロットに話しかける大バカもとい魔王。

「くだらねえとか言つよ！つか『テルフ、元はと言えばお前のせいだつて分かつてんのか？！』

「そうですね。それでは継承の儀を執り行いましょう。」

ああっ、姫さんにまでスルーされたつ。勇者の立ち位置つてこんな軽かったつけ？

「ついて来てください。」と俺が召喚された部屋から廊下に出るシャルロット。言われた通り着いて行く俺と『テルフ。

「なあ、継承の儀つて何だ？」

「簡単に言えば、勇者様の武器を召喚するんです。」

シャルロットが歩きながら答えてくれる。

「へー。やっぱ剣とかか？」

「あ、人によってまちまちですから、私にはなんとも。」

曖昧な返事をするシャルロット。出来れば剣より銃がいいのだが。使つたこと無いけどね。

「着きました。」と言われて通されたのは、俺の背丈位の姿見が置かれた薄暗い部屋だつた。

「それではこの姿見に手を入れて下さい。」

「これに手を？」

「それは選定の鏡という魔具よ。その中にそなたに一番相性の良い武器がはいつておる。魔術そのものが形を持った物で有る故、外見はさほど眞にする必要はない。」

と後ろから答えてくれるデルフ。なんと分かりやすい説明だらうか。不覚にも見直してしまつた。馬鹿と頭の良さは比例する訳では無いらしい。

「ああ、入れてみるが良かう。」

デルフに促され恐る恐る鏡手を触れる。

鏡は俺に触れられた瞬間淡い青の光を発して、俺の手を受け入れる。液体のようなジェルのような何とも言い難い感触の中、ふと固いものに触れたのだった。

剣だろうか。柄のような部分を掴んで一気に引き抜く。

「そりやつ。」

鏡から出て来たのは、槍のような物だつた。黒く艶やかな柄、そこ

から伸びた部分は、頑丈そうな布のよつた物で覆われていた。それはまるで俺らの世界の傘のようだ……。

引き抜かれた物を見てシャルロットが目を丸くしている。隣に立っているデルフの顔は兜のせいで分からんが、多分驚いているのだろう。そしてシャルロットがポツリと

「…………ですね。」

「…………傘……じゃの。」

「ああ、やつぱり傘なんだ？！……てかこっちにも傘あるんだ？！」

一重にびっくり。

「はい、貴族の女性しか使いませんが……」

「これは何かの間違いだろ！？」

「はあ、しかし選定の鏡は一人一度しか使えません。」

（氣まずそつなシャルロット。）

「えええ～。これじゃ無理だろ。んじゃ何でも良いから普通の武器くれよ。」

「それが無理なのだ。」

（氣の毒そうな声で話し掛けてくるデルフ。）

「なんで？」

「選定の鏡から取り出した者はその武器以外は使えなことになるのだ。」

「何だつて？ どうこいつただ？！」

「例えば、他の武器を使った瞬間毒に侵されたり、激しい動悸とめまいがしたりとかかの」

「何だそりや！ ただの呪われた武器じゃねねーか！！」

しかも動悸つておじこちやんか！

「そもそも選定の鏡から出る武器は高性能な物が多くての。そんな問題は殆ど起こらなかつたのじや」

「傘でどいつ戦えつてんだ！」抗議を込めてシャルロットに手を向ける。

「撲殺つ・・・でしようか？」

「撲殺つ？！ それって戦い方じやねーだり！..」

なんて事言つんだこの姫さんばー

「まあ、しょうがないですから対策は考えて起きましょつ。」

と溜息を吐きながら部屋を出るシャルロット。溜息吐きたいのは俺なんだが。

「出発まで一週間あります。それまでゆっくりなさって下さい。」

シャルロットは家来を呼び俺の案内を命じた後、そう言い残して去つたのだった。

3本目 ブロークンハートへ壊された心で

一週間後、出発の日。

俺は城門の前でデルフと姫さんを待っていた。

ちなみにシャルロットが言つていた対策とは彼女自身がパーティーに加わるという事だった。何でもシャルロットは上位の治癒魔法が使えるらしく、3秒以内なら死者さえ蘇生出来るらしい。

「どれだけ苦痛を味わつても死なないですから安心して下さいね。つて言つてたつけ。彼女と俺の目的が違うよつと思えるのは俺だけだろうか。

そして、今の時刻はおそらく毎に差し掛かった位。集合は朝だったはずなのだが。

「遅い。何してんだアイツら。」

思わず呟く。だが奴ら来ない。

それから30分くらい経つただろうか、漸く城から一人が出て來た。

「おはようござります。」

「待たせたかの？」

何事も無かつたかのように話しあがくするデルフとシャルロット。

「待たなかつたとでも？」

満面の笑みで答える俺。

笑顔に隠れた怒りを察知したのか、少し慌てた感じで「テルフが言った。

「待て、こつこれには深い訳があつて……」

「ほう、聞かせてみな」

「う、うむ。実は、ソナタの持っていた鞄の中になつた“まんが”と言つものを見つけて読んでいたら遅くなってしまったのだ。」

・・・・ん？漫画？そんなものあつたか？自分の記憶を引っ張り出す。そして青ざめる。
・・・・まさか。

多分奴らが言つているのは友達から借りたH○マンガの事だらう。すっかり忘れていた。

「申しわけありませんでした。勇者様。あんなのを読んだのは初めてで。」

「いやつ。もういいからつー怒つてないから。ア

必死に怒つてないよアピールをする俺。

「それにしても勇者様つて“ロココン”だつたんですねえ。」

「ブツー！」

堪らぬ噴き出す。ダーハルめ。ロリータものなんて貸しやがったのか。

「んなわけねーだろーーー！」

慌てて弁明する俺。

「ええっ、じゃあ熟女萌えですか？」

驚いた顔のシャルロット。

「違つわつー何でそりなるー！」

「まさか、それ以上・・・。」これは呼び方を変える必要がありま
すね。アウトローと名乗つては？

「ちばーよー！なんだアウトローつてーーー！」

「どんだけ愉快な性癖してんだよ俺はーーー！」

「それではー体・・・・」

仕方ない。これ以上不名誉な名前を付けられても嫌だ。

「俺はもひとつ普通の同い年位の子が良いんだよーーへ、お前みたい
なー！」

やつにシャルロットを指差す。

驚いた顔のシャルロット。しかし直ぐに優しく笑って

「『』めんなさい。私、ヘタレは対象外なんです。」

・・・・・・・・ フラれた。

何でフラれたのだろうか。告つても無いのに。
あつ、目から汗が。

「泣かないで下さい。勇者様は良い人だと思いますよ？」

グサツ

シャルロットが優しく宥めてくれる。けれども俺の汗は止まらない。

「勇者様は良い人ですから。」

グサツ

「きつと良い人来ますよ。」

グサツ。パリーンツ。

「うわああああ！――！」

壊されたマイハート。
さよなら。俺のプライド。
さよなら。俺の威厳。

ある晴れた日のこと。

ある少年は優しい言葉は人の心を壊すということを知ったのだった。

4本目 魔物の命、Principles

「まずは資金を作りましょう。ヒカル。」

とやたら庶民臭い事を言つシャルロットもといシャル。何で呼び方が変わつてゐるのかつて？

シャル言わく「私が姫つてばれると面倒臭い事になりますから呼び方を変えましよう。勇者様つてばれても面倒臭い事になりますのでこの際に。」だそつだ。といつて名前と愛称で呼び合つてゐる訳だ。

ちなみにデルフは相変わらずデルフのままだつたが。

「王国が出してくれるんじゃないの？」

「王国も魔物討伐の費用で手一杯なのです。」

「ふーん。んでどうすんの？」

「まずアラクネの森でポムポム狩りをしましょ。」

「ポムポム？」

「ポムポムとは俗に言つスライムみたいなものじゃ。かなり弱い故、倒すことは容易ではあるが、何分数が多くての。今や野放し状態になつておる。食用として需要がある故、ある程度稼ぐ事は出来よ。」

と解説をしてくれるデルフ。最初はバカだったのに最近解説役で知名度を上げているな。・・・うーむ。気をつけ無いと次のバカは

俺かもしれん。

「わあ、ポムポム狩りヘレッジゴーー。」

ピヨンと跳びはねるシャル。ノリノリだな。不覚にも可愛いと思つたのは内緒だ。

この時の俺はまだあんな惨劇が起つて知るよしもなかつた。

所変わつて森。森と言つだけあつて見た目ヤバ氣な植物がわんさか生えている。

今俺達がそれぞれ持つてゐるのは、50センチ位の瓶とすり鉢の棒みたいな物。なんでもシャル言わく重要アイテムなんだそうだ。森の中を歩いていふと、

べーひ

あれつ？なんか踏んだよつな・・・・。

足元を見てみるとピンク色の物体。およそ20センチ位だろうが。そのピンク玉は昔ア○フルのCMに出でいたチワワのよつぱりな瞳をしていた。

「おおつー可愛いなコイツ。」

思わず手に取る。感触は・・・・そうだな。さじすめ水饅頭と言つたところだらうか。

ふざゅ、ふざゅとちよつぴりブサイクな泣き声をあげてゐる。ああ、癒されるなあ。これが今流行りのブサ可愛いだらうか。

「なあ、何か『イツ可愛いぞ。』そつ一人に話し掛ける。

「おお、それがポムポムじや。」

と教えてくれるデルフ。

「ええつ？『イツがポムポムなのか？』

「こんな可愛いのが？確かにスライムとは聞いていたが。正直、俺には狩れそうもないのだが。

「それではやり方をお見せしますから、良く覚えてくださいね。」

そつ言つて俺からポムポムを奪つて持つて来た瓶に入れるシャル。

「つておーー何する氣だ！

とてつもなく嫌な予感がする。

「何つてこうするんですよ。」

そう言つてシャルが瓶に棒を突っ込もうとする。

「やめやめやめ……。」

ふざくつー。

卷之二

卷之三

突っ込まれる回数に応じて断末魔をあげるピンク玉。

「ボムボム～～～～～！」

俺の叫びも虚しく、あの愛らしいピンク玉はただの液体へと成れ果てていた。

绝望にしあひしかれてしる俺を見て

「仮にも勇者様なんですからしつかりしてください!」

情けない無いなあ、もうっ！みたいに腰に手を当てて寝めるシャル。

「こんな事つて、子供でも出来ますよ。」

「そんな子供見たくないわーーー！」

「はあ、」れだからゆとり教育は。

シャルが溜息をつく。

「なんでそんな言葉知つてんだよ！」

「急に頭に浮かんで来ました。」

「宇宙人かテーマは！！！」

「まあまあ、ヒカルはまだ慣れていないのであります。今日のところは我々で殺る事にした方が良かろ？』

「そう言って助け船を出してくれるテルフ。

おお、なんて良い奴なのだろうか。本当の魔王はコイツじやなくてシャルなんじやないかって思っちゃったのは内緒だ。

きつと殺られるから。

聞いたところによると、この世界では一枚あたり、鉄貨 100円、銅貨 1000円、銀貨 10万円、金貨 100万位になるらしい。

ちなみに今日の収穫報告。

デルフの超人的な技で集めたポムポムエキス、10樽。

それによって得た、銀貨 5枚、銅貨 一袋。

失われたポムポムの魂

プライスレス。

5本目 小鬼の中で輝いて

『かさ【傘】 雨・雪を防ぎ、また日光などをさえぎるため頭上にかざすもの。からかわ・いづもりがさ・ひがさなどの総称。さしがそ。』 広辞苑より

だそうだ。決して武器ではない。だから良い子は傘があつてもマネをしちゃいけないよ？

ここはダブリス荒野。この世界で1番でかい荒野らしい。確かにこれは納得だ。見渡す限り荒れ果てた地が続いている。それだけじゃなく魔物のエンカウント率が高いらしい。

あの忌ま忌ましいポムポム狩りからはや一日。この一日でアラクネの森を抜けここまで来たのだが、奇跡的な事にあれ以来まだ魔物と御対面をしていない。

それだけに俺達の緊張は緩みきつっていた。

遠くに入らしきシルエットが人が見える。

「おい、シャル。あれ人じゃないか？」

丁度水も尽きた頃だ。給水ぐらい出来るといいのだが。

「あつ、本当ですね！ 少し水を分けて貰えるかもしれませんね！」

と嬉しそうにはしゃぐシャル。流石に女子子には荒野越えはキツいのだろう。俺だってキツいんだ。当たり前か。

「ふむ。なかなか良いタイミングじゃの。」

微妙に上機嫌のデルフ。あれ？ コイツもキツかつたんだ。ちょっとびり意外だ。

そして三人はそのシルエットへ向かつて走り出す。

「おーい。」

とりあえず手を振つてみる。気付いたのだろうか。そのシルエットは棒の様な物を上げ下げし始めた。その瞬間、

「待つのじゃ！…！」

急にデルフが鋭い声をあげる。

「なんだよ？」

「あれは、あれは『ゴブゴブ』じゃ……！」

うろたえるデルフ。

「ゴブゴブ？」

「子鬼の一種で、凶暴かつ残忍な性格の中級使い魔です。正直かな

り強いです。」

うろたえるデルフに代わってシャルが説明してくれる。

「んじゃ逃げないとマズイじゃんか！」

「いや、もう無理じゃ。囲まれた。」

氣付けばゴブゴブ達に包囲されていた。数はおそらく10匹位だろう。身長は低く、140センチ位しかない。かなりビックリするデルフ。

「つかお前魔王だろ……中級ぐらい何とかしろよ。」

「出来ぬ！あんな氣色の悪い生き物なぞ見たくも無い。」

とデルフが後退る。

「虫だけじゃなくてゴブリンもダメなのかよ……！」

ホントに魔王かテメーは！

くそっ。役に立たねーな。そう思いながら辺りを見回す。気が付くとシャルの目にうつすらと涙が浮かんでいた。怖いのだろうか。怖いよな。

皆を助けたい。そんな思いが浮かぶ。胸が熱くなる。その瞬間、傘が光を発した。今までにない激しい光を。

傘から力が流れ込んでくる。そして力の情報も。俺に『えられた力。それは、えつ？・・・・動態視力？なんと強化されたのは動態視力だけらしい。

ええ～～～。

まあ、無ごみりかはマシだひつ。今はシツ「//」をやむ時間はない。
だからわづ細づう」とにする。

「ヒカル？」

不安そうに見つめるシャル。

「大丈夫。任せろ。」

そう言い残してゴブゴブ達の所へ走る。

「おい、ブサイク共！テメーらの相手は俺がしてやる！」

話が分かつたのだろうか。ゴブゴブ達は一斉に押し寄せてくる。

15うん。

不意に正面から振り下ろされるこん棒。でもその速度とともに遅く感じられる。見える！見えるぞ！

俺はこん棒を体を捻りながら右斜め前に踏み出す事でかわす。そして振つてきたゴブゴブの裏に回り込んで傘で突く。

何か良く分からん事を言つて倒れたゴブ、ゴブを掴んで投げる。

Ladoga.

元々ゴブゴブは軽い。多分20キロ位だらつ。

俺が投げたゴブゴブは三人ほど巻き込んで倒れた。直ぐさま倒れた奴らの、口では言えない急所に傘を叩きこむ。

「アホーッーー！」

急所を叩かれたゴブゴブ達は泡を吐いて失神した。

「まず4匹！」

やられた仲間を見て少しうるたえるゴブゴブ達。が、直ぐ俺に襲いかかってくる。

今度は2匹同時に左右からの正拳突き。それを一步下がることでかわす。かわされた拳はそのままゴブゴブ達に吸い込まれる。

「ツムツムーー！」

はい自滅。

これで6匹。

「ア・ジ・タ　ガー！」

さらにもう1体が殴り掛かってくる。

俺はその拳を左側に弾きながら右足を軸にして回転。傘のカーブになっている所をゴブゴブの首に引っ掛け、引っ張る。

「ヒュッ！」

叫びにならなかつた息がもれる。

「秘技、寝首に水」

あつ、今バカつて思つたろ？笑うなよ、一生懸命考えたんだから。

「さて、あと3体は、」

見渡して、青ざめる。俺には勝てないと踏んだのか、残りの3体がシャルとテルフに襲い掛かるうとした。

「シャル！テルフ！」

このままでは間に合わない。そう思つた時、

「おっお主ら来るで無い！来るな！来るなーーー！」

錯乱したテルフが突如ゴブゴブに向かつて叫んだ。
その瞬間、

ドゴオオオーーー！

大きな音と共に雷が落ちた。そして残つたのは消し炭になつたゴブゴブ達。啞然とする俺。

あーなんと言えばいいのか。
とりあえず俺の努力ムダ？
もう言葉もでない。

ひとしきり呆れたあと、安堵の為か、俺は腰が砕けてしまったのだった。

「ありがとうございました。ヒカル。」

気付けばシャルが近くに来て俺のことを見つめていた。

「結局助けたのはテルフだけだな。」

「そんな事ありません。ヒカルは勇敢でした。その・・・格好良かつたですよ？」

顔を赤らめるシャル。
やべっ。可愛い。

「ほつ、ほら行くぞ！」赤くなつた顔を見られたくなくて、俺は立ち上がりて歩きはじめるのだった。

6 本目 人生の転機、どうある? どうするの俺?!

蹄が大地を叩く音が響き渡る。

『2番が依然トップ! それを1番が追い上げる!』

場内に実況のアナウンスが流れる。

『さあどうだ! 1番が追い付く! 競り合つ! おおつと? 1番転倒! 2番が巻きれる! ああつと、1位は? 1位は? 何と2番だ! これは予想外だ! 大穴だ!』

耳をつんざかんばかりの歓声。その中には歓喜と悪態の声が入り乱れている。

「ヒカル! それ当たつてますよ! ヒカル! 激しいじゃないですか!」

「なんと……あれを当ておったか!」

興奮しているシャルとテルフ。シャルがあまりの興奮に肩を叩いてくる。痛い! 痛いって!

冒頭の流れで分かつて頂けましたでしょうか? 大変なことになつてます。

ここは娯楽施設で栄えている街、ラスカス。ダブリス荒野の中心より少し南に位置する、言わば荒野の中の才アシスというところだろうか。

俺達がいるのは、ラスカスの中でも人気の高いキマイラース場。

まあ、名前のとおり競馬みたいなもんなんだけど。 大穴が当たつたみたいですね。

配当は、……金貨10枚？

「なにい！ 金貨10枚だつて？！」

金貨10枚つて、1000万円相当じゃねーか！
軽いノリでやつたのに……。

番号なんて声優のみず……ゲフンゲフン。に掛けでフにしたぐらいなのに。

隣のオッサンなんてよっぽど大損したのか発狂してるよ。
人生つて理不尽だよな。
まあ、ビギナーズラックといつことで。

「何を買つて頂きましょつか？ 指輪、宝石、『』馳走して頂くのも
良いですね。どうします？ デルフ？」

「そうじやの。この際新しい魔具でも調達するかの！

やんややんやと話に華を咲かせる一人。

「イソラ俺にたかる気か？

「お前、俺にたかる気か？！」

「いいじゃないですか！ 金貨10枚もあるんですから！ ケチだと女性に嫌われますよ？」

グサツ！

ヒカルの精神に180のダメージ。ヒカルからエクトプラズマが漏れた。

「シャルロット、言こ過ぎじや。ヒカルも、本当の男つてものをシヤルに見せ付けてやつたらどうじや？」

「それもやうだな！」

「復活が早いのう」

「ほんなんで落ち込んでられるか！ さあ諸君！ 行こひげ諸君！」

そう言つて俺は勇んで市場へ歩きだした。

「……た、単純」

一人が呆れたように発した言葉は、もううん聞こえてる訳もなかつた。

といつわけで、市場。

「はあ～～。いつぱいあんなあ……。」

市場には屋台のよつなものが多く、通りに沿つて延々と続いている。

野菜や果物といった青物を売る店や日用品などを売る店、はたまた剣や防具を売る店まで、その種類は数える気にならない程に多岐

に渡っていた。

「ラスカスは商業都市でもあるからの」つ

「そりなのかな。すぐ~なあ……」

「ふふっ。ヒカル、口が開きっぱなしですよ~。」

「だつてこんなのは初めてだぜ?」

「ふざけるのもいい加減にしゃがれ! ああ?! ガキだからって
容赦しねえぞ!」

突如響き渡る怒号。

驚いてその音源を探すと、そこには恰幅の良いオッサンと、12
才くらいの小さな女の子がいた。
辺りの通行人は皆、我関せずといった風に見て見ぬ振りをしてい
る。

「くそつ、見てらんねえ。おいつ! オッサン何してんだ!」

とホッサンと女の子の間に割つて入る。

「なんだテメエはー、俺はこのガキに用があんだよー。」

オッサンが唸るようにドスをきかせてくる。
女の子を見ると、その瞳には涙が貯まっている。

「「」の子泣こておじやねーかよー もつ少し言に方があんだりー」

「向もしひねばへせじやばとなやー 小僧ー」

「何もしひなくたつせつて良こ事と悪こ事べり二分かるだりー
説べりい話しやがれー」

負けじと俺も怒鳴り返す。

「はつ…………良いだり、やこまで言ひなり教えてやるよー。こいつ
はなあ、俺が厚意でこのガキのキマイラをレースに出してやつての
つてこいつの元金を払おうとしたしなえんだよー。」

「だつ、だつてあんな金額……」

「ああ?ー なんだつてー!」

「「」あんななー……」

オッサンに怒鳴られて、ビクッと縮こまる女のN。

「こへりなんだよ?ー!」

「はつ、テメエが払うのかよ?ー! 良こぜ、やんなら教えてやる。
金貨3枚だ」

「なつ、それなこへり向でも高すぎませんか?ー!」

驚きに思わず話に入つてくるシャルロット。

「ああ？！ 知らねえな。」

オッサンが嘲るように笑う。

「別に他の方法だつて良いんだぜえ！ そのガキのキマイラぶつ殺して肉にして売つたつて、このガキかそこの綺麗なねーちゃん搔つ払つてどっかに売り付けたつてなあ！」

ギヒヒとシャルロットを指差して不快な声で笑う。

シャルロットがギリッと拳を握つたのを見て、俺が手で制する。「良いだろ？ 払つてやるよ。ほり、拾えよ。下種。テメーの腐つたプライド、俺が買つてやるよ！」

そう言つて俺はオッサンの足元に金貨を3枚投げる。するとオッサンの顔が墳怒の形相に代わつた。

「喧嘩売つてるみてえだな…… 小僧！」

怒鳴りながらもきちんと金貨は拾つオッサン。本当に下種だな。

「買つてくれんなら金貨3枚で売つてやるぜ？」

そう言つてオッサンを挑発する。大体ゴブゴブ相手に勝つたのにただの人間に負けるはずがない。

だから思う存分煽つてやつたのだった。

「死にさらせや、小僧！」

「死ぬのはテメーだ！下種！」

二人が同時に動き出す。

そして、

「はつ、馬鹿が！格好つけやがって」

オッサンが去つて行く。

そう、負けたのはおれだつた。

何故かゴブゴブ達の時に使えた動態視力強化が使えなかつたのだ。

「本当に貴方つて人は……馬鹿なんですから」

呆れた声を出すシャルロット。しかし彼女の顔には優しい笑みが浮かんでいた。

「ああああのつ！」

声の方に顔を向けるとそこにはさつきの女の子がいた。

「あのつ！ すみませんでした！ その、助けていただい……」

「ああ、気にするな。俺が好きでしたことだ。カツコ悪かったけどな

「そんなことありません！ とても格好良かつたです！ それで、それ

で、あなたに恩返しがしたいんです！」

両腕をぶんぶんと一生懸命ふりながらじしゃべる女の手。

「恩返しつたつてなあ……」

そんな氣せんせんなかつたのにわざわざ言われてもなあ。

「良いんじやないですか？ねえ『テルフ』？」

「やうじやの。その娘もこのままでは納得こゝまこと

わつきまで俺がボコボコにされる様をずっと傍観していた『テルフ』
が答える。

「マイツめ、後で見てやがれよ？まあ、あそこで助けに入られて
も困つたのだが。

「うーん。……何か複雑だな。

「ホントですか？やつた！じゃあ家に案内しますね？」

ぴょいぴょいと踊るよつて歩く女の子。

「あつ、やうだ！私、リザ・オルコットって言います、

「俺は高瀬光」

「私はシャルロットと言います。よろしくお願ひしますね」

「私は『デルフリンガーハー』」

「よろしくお願ひします。それでは行きましょう。」

リザはぺこりとおじぎをして、家へと俺達を案内してくれたのだった。

……余談だが、リザの家に着く前にデルフが少し行方不明になつた。まあすぐに帰つて来たのだが。

風の噂によればそれと同じ頃、リザに詰め寄つていたオッサンの組織の事務所が謎の壊滅を遂げたらしい。

更には、その後に孤児院に正体不明の大金が贈られてきそうな。誰がやつたのか、その田畠はまだついてないという。

6 本目 人生の転機、どういったものか？！（後書き）

5000円越えたら番外編まがいのものをやりたいな……（
、）

えっ？ その前に早く更新しろって？

その通りです、調子一にしました。ごめんなさい、ハイ。

7 本日 勇者《ヤシ》に向かって吠える

「 わあ、つきました。」 じーが私の家ですよ

案内されたのは一軒の小さな鍛冶屋。

店は小さしながらも老舗のよつたる風格がにじみ出ている。

「あれ? リザの家は鍛冶屋だったんだ」

「 セウですよ。で、じーがキマイラのグレモア。グーサーんつて呼んであげてくださいね?」

セウは隣にいるキマイラの隣に手をのせる。

出来ればスルーしたかった。

だつてさあ……俺と同じくらいの大きさのライオンなんてありえんだろ!

いやまあライオンでは無いんだけどさ。

「 そもそもキマイラって何なんだ? もしかしてレースの為にわざわざ?」

「 キマイラは元々、対魔物用に造られた複合生物のことです。といつても実際に戦闘力はあまりなく、足が速いため主にレースや交通手段に用いられています」

「 シャルロッター 我の出番を取るでない! ただでさえ出番が少なこと言つてた!」

説明をシャルに取られて焦つているデルフ。

「あー分かった分かった。俺が出番増やすよつに言つとくから。とりあえず落ち着け」

とりあえずなだめてみる。

「誰にじや？」

「もちろん上の人！」

「上の人？！」

「デルフには分からんよつだ。きっと誰かが補正を掛けているのだ
ろ？」

「はいはい、そこまでにしてください。リザが困つてゐるじやないで
すか」

パンパンヒシャルが手をならす。

「ああ、悪かつた」

「いえいえ、大丈夫なのですよ？」

若干引きつり気味の笑顔を浮かべるリザ。

会つた時からたまに敬語の使い方がおかしく感じる時があるよ
うな気がするんだが、気のせいだろうか。

「リザ……、もしかして無理をしていませんか？ 敬語なんて使わなくてもいいのですよ。」

あ、シャルもそう思っていたのか。

「え？ やっぱり変ですか？ よく言われるんです。そんなつもりはないんですが……」

戸惑い気味のリザ。

「……まあ氣をつかってないなら別に良いんだけどさ

「とにかく普通の敬語だとシャルロットさんと被るから。うしいですよ？」

「ちよっと待て！ 誰がそんなことを？！」

「もちろん上の人」

「そこですか……」

Jの話が始まつてから上の人の干渉率が急上昇してゐるな。

「あ、あの、もし氣を使つたと言つて貰へるんでしたら、その、お兄ちゃんって呼んで良いですか？！」

顔を真つ赤にしながら上田使いで見上げてくるリザ。

ぐお？ 何という破壊力だろ？

別に口利コンなわけではないがイケナイ道に外れてしまふそうだ。

「あつああー ゼツゼンゼン構わないぞー！」

うわ、必死だな。俺。

「ヒカル？」

ゾクリと。

それはもうゾクリとおぞ気がした。
見ればシャルがこっちを向いて笑っていた。でも……目が笑っていない。

「これでは本物ヒカルロー（Out law）ですね」

絶対零度の視線を浴びせてくるシャルロットさん。

「ちつ違つわ！ 確かに少し良いとは思つたけど……」

「えつ、ええつ？ー」

ついに出た本音に狼狽するリザ。

「死刑」

「あの……シャルロットさん？」

「刺殺、絞殺、毒殺、どれが良いですか？」

笑顔つー 笑顔が「ワイヤー・シャルロットさんー

「……弁明の余地は？」

「撲殺ですね？」

「一番エグいな！ デルフ！ 助けて！」

「出番が増えたらの」

「ああ！ デルフまで！
くそつ、かくなるうえは……」

「「あつ、逃げた！」 とにかく逃げるしかない。怒りが冷める
までは。」

ダッシュ。ダッシュ。ダッシュ。

「待ちなさいー！」

ひー！ シャルロットが追つてくる。はええー、早過ぎるー。
それになんだこのプレッシャーはー。
ズドズドッて感じの効果音が聞こえてくる。

「いやあああ！ 助けてえええ」

……一時間後、ラスカス郊外で血溜まりが発見された。しかし
くら探しても死体は見つからなかつたそつた。

「はっ！」

ガバッと身を起こすと俺の身体には布団がかかっていた。
なんか嫌な夢を見たきがするのだが……

「大丈夫なのですか？ お兄ちゃん？」

横にいたのは女の子だった。

歳の頃は十一歳くらいだろうか。

腰まで伸びた長いピンクの髪に白い肌と整った顔立ち。
大きな瞳は優しげで、まるで聖母のそれのような慈愛に満ちてい
る。

まあ俗に言う美少女なんだが、ロリコンじゃない俺にはこれから
の成長に期待というところだろうか？

「……君は？」

「ええっ？！ 私の事、覚えてないんですか？」

いきなりそう言われてもなあ。

「リザですよ。ヒカルが助けたんじゃないですか」

隣にいたシャルロットが教えてくれる。

俺が助けた……？

ああ、思い出した。そうだった。……あれ？ でもなんで。

「でもなんで？」 疑問が自然と口に出る。

「そつ、それはヒカルがあの男性に受けたダメージのせいで氣を失

つてしまつたんですね

あれそつだつたつけ？ いまいに出せないな。

まあいいか。

必要な事ならそのつむ想い出すだらう。

まあいいや。それよつ腹が減つたな

「わうですね。じゃあ」飯作っておまかね。シャルロットお姉ちゃん、手伝ってくれるですか？」

「 もちろん、まあ行きましょ」

「機嫌な様子で部屋から出て行く一人。
それとすれ違つて、ナルフが入つて來た。

「どうした？ テルフ」

「ああ～なんじゅ、そのお。すまなかつた、ヒカル

「何謝つてんだ？よくわかんないんだが

「 そつか、まあじつけの話いや

変なやつだな。

「あつてとい、俺達も行こ」

「知らぬが仏、かの」

魔王が呟いた言葉はきっとヒカルには届かなかつたに違ひない。

8 本目 勇者《ヤツ》はバカですか？ はい、しかも鈍感です

「ところで親御さんは？」

リザ達の作ってくれた飯を食べながらさりげなく聞いてみる。

「実は私が生まれてすぐ……。祖父も海賊王になる… といつて去年出て行ってしまいました」

……これは謝るのが先なのだろうか？ それともツッコむのが先だろうか？

「……えっと、『めん』

とつあえず謝ろわ。

「なんで謝るですか？」

不思議そつに首を傾げるリザ。頭にはクエスチョンマークが浮かんでいる。

本人は気にしてないみたいだ。

「じゃあリザがこの鍛冶屋を？」

シャルが尋ねる。

確かに、来たときにはドアに“OPEN”的看板があった。

「はい！ でもあまり人は来ませんが」

えへへ、と恥ずかしそうに笑つリザ。

「それならヒカルもアレを改造して貰つたらどうですか？」

「セウジヤの。流石にあれではの」

「セウだなあ。やつてくれるか？」

でも出来るのだろうか。何せ傘だしなあ。

「はい！ もちろん！ それで得物は何ですか？」

「つ、目がキラッキラしてる。……言えない、言えないよー。傘が武器だなんて……」

「 傘」

「ああー。一人が言つちやつたー！」

「傘……ですか？」

キヨトンとしているリザ。

そりゃセウだらうよ。傘ってそもそも武器じゃねーもん。はあ、これは一から全部話さなきゃならぬいか……

「実はだな……かくかくしかじか

てか『テルフ』がもう話てるしー。

「それでヒカルのかばんから漫画とこうものが……」

「チヨエエストオオオオ！」

デルフの顔面に向かって傘でフルスイング。

「ぶべらつー」

一撃で失神するデルフ。練習しといて良かつたかも知れない。

「まつ、まあ 大体分かったろ?」

汗をだらつだら流しながらリザに問い合わせる。

「うん。でも“まんが”つて?」

「子供は知らんじよろしくー!」

「リザ? それはですね?」

今度はシャルか?!

「チヨエエスト」

「私を殴るんですか?」

瞳を涙でうるわせながら上目使い、といつ上級コンボをつかつてくる。

これは可愛くないとできない技だ。

ぐはつ！

2 Hit！

ヒカルの良心に1000のダメージ！

ヒカルの正義感に500のダメージ！

あとついでに消費税で7.5のダメージ！

「最後のはいらねえだろ！」

OVER KILL！

ヒカルの心は砕け……

「砕けるかあ！」

そうだ、俺はまだくじける訳にはいかない。

守りたい世界ブライドがあるんだあああ！

仕方ない、これは正直使いたくは無かつたんだが……

俺はゆらりと立ち上がりシャルの所まで歩き、そして……

「お願ひします。シャルロットさん！　ijiせどつか！」勘弁を…」

THE土下座。

そう、日本人の心、土下座。

困ったときは土下座か逃げろって昔の人気が言つてた気がする。

「とりあえず、デザートを置つてきて下せこまますか？」

笑顔のシャルロット。セリヤもうじびきつの笑顔。

「パシリかよつー。」

「リザ？　ヒカルの漫画といつのは……」

「ああっ！　分かつた！　分かりましたからー。
つたく、太つてもしらねえぞ……」

「なにか？」

「なんでもねえよ。……体重が体重がつて言つてたくせに」

「た、確かに少し体重が増えてしましましたが！　でも、でもつー。」

興奮した様子で詰め寄つてくるシャルロット。
顔が近いっ！

「ま、まあ少しがらり太つたつて誰も気にしねえって」

沈黙。

そして……

「……ひ」

「ひ？」

「ヒカルのばかあああ！　うわ～ん！」

勢いよく家から駆け出すシャルロット。
うわーんつてあいつ……キャラ崩れすぎだろ。

「追いかけた方がいいですよ？　といつか追いかけないとダメですよ、お兄ちゃん」

「やつぱつ？」

「うふ。あれはなつと……」

そんな呆れた顔しないで下されよ、リザさん。

「まあ少し言に過ぎたけど」

「少しじゃないですよー。あんな事ばっかり言つてたら恋人なんてできませんよ？　まつまあそうなつたら、わつ私が……」

がふり

遂にリザにまで言われてしまった……。
がつくづくなだれる俺。

「つて聞いてくださいよー。う、せっかく頑張ったのに……
もう一いつまでウジウジしてるとですか！ 早く追いかけてくだ
れこー！」

腰に両手を当たし、怒ったように叫んでくるリザ。

「あの……なんで怒つて
「怒つてない！ ほら立つー！」

「ハイツ！」

「ダッシュユー 傘は改造しておきますから。ちゃんと仲直りしていく
る事！ いいですね？！」

「サー、イエッサー！」

そう言つて家を飛び出す俺。

「ええよ！ 女の子！ ええよ！ そんな恐怖に衝き動かされ
て街をさがしまわったヒカルなのであった。

「あとシャルロットを見つけてから色々あつたのだが、それは
また別の話……。

8 本目 勇者《ヤツ》はバカですか？ はい、しかも鈍感です（後書き）

『座談会、今日の出来事』

デルフ「のう作者、今日はまだしも、最近我的描写が激減しているのはきのせいかの？」

作者「い、いやそんなことは……ある、けど大丈夫だ！ 次は大丈夫だ！」

デルフ「ホントかの？ もし無かつたら……分かるのう？」

作者「はっはい！ といつわけで次回

『だつてドラゴンだもの』
『ひづ』期待！』

リザ「サービスサービス」

ヒカル「エ、アの最後パクつちゃ駄目だろー！」

9 本日 だつてドラゴンだもの

「あつ、お帰りなさい。

ちゃんと仲直り出来たみたいですね」

家に戻ると待つてくれたらしいリザが駆け寄つて来てくれた。

「ああ、なんとか……な。ところで傘は？」

「ええと……一応出来たのは出来たですが。一つしか拡張できませんでした」

少しうなだれ氣味のリザ。

「できたの？」

傘つて武器に出来るもんなのか。ある意味驚嘆に値するぜ。

「はいです！ 能力は部分的魔力付与セイリ・エンチャントです

「ヤ///・Hンチャント？」

「はい。簡単に言つとこの傘の魔力を身体の一部に取り入れて身体能力を上げるといつものです」

「ああ！ 何かスゴイなソレ！」

「これで俺もエクス リバーをもつたア――王よろしく英雄になるのだろうか？」

……宝具は傘だけだ。

「ホントは口 ットブースターとか波 砲とかビー サーベルつけたかったんですけど……。
意外とわがままボディでした……」

本当に悔しそうな顔をしているリザ。

この娘は俺を一体何と闘わせるつもりなのだろうか？

ガン ムだらうか？

生身で歪んだ戦場に介入させる気なのか？

それともツイン スターライフルを持つ羽の生えたガン ニウム
合金と闘わせる気なのか？

「とりあえず、わがままボディってそういう使い方じゃないと思つぞ……」

「はあ、出来ればファ ネルかドラ 一ソつけたかったなあ……。
あれは漢のロマンだよね～お兄ちゃん？」

「リザは男じゃないけどなあ」

そんな恋する乙女みたいな顔でファ ネルとか言っちゃいけません！

「分かつてます！ 男だつたらお兄ちゃんのお嫁さんにならつて約束守れないです！」

「初耳だけどなソレ！」

何を言ひ出すんだこの娘は！

「ひ・か・る？」

風鈴を鳴らしたような美しい声が響く。

……振り向けない。

すさまじい癪気が漂つてくる。それはもう異現化するほどだ……
シャルロッタさんは魔王なんですかね。

「やめておけ。話が進まぬではないか」

見兼ねて出て来たのはテルフ。

シャルもそう思つたらしく泣々だまる。
マンネリ化を未然に防ぐとはなかなか作者孝行な奴である。

「これで出番が……」

これが無ければ話だが……。

「ところでその傘は？」

「あつはー！ 今持つて来るです！」

ダッシュで家に帰るリザ。あんなに急がなくとも良いのこ……。

「これです！」

さつき凄いと言つたせいか、さめてほめてと言つたそな顔のリ

ザ。

なんか犬みたいだ。
個人的には「わふー」と言つて欲しい。

ただ、その純真無垢な女の子に抱かれていたのは変わり果てていた相棒の姿だった。

「あの……リザちゃん？ なんでフリフリがついているのかな？」

そう、今までスリムで知的なオーラを放っていた相棒の身体には白いレースがふんだんにあしらわれていた。

「え～。だつて可愛いじゃないですか」

「可愛くしてどうするー。何の使い道もないもんをこんなにつけるなよー！」

「これでは違つた意味での勇者になつてしまつ。

「使い道はあるですよ？ とりあえず触れれば切れます

なるほど……だから俺の手が血だらけなのか。

「つひもつと早く言ひてへんないっ！」

なんて極悪な兵器になつてしまつたのか。

「てかなんでリザは切れ無かつたんだ？ 抱き抱えて来たのに

「ああ、それは認証プロジェクトが働いているからです。」

「認証プロジェクト？」

「登録した人間には危害を加えないようにする言わば鍵みたいなものです。一応デルフさんとお姉ちゃんと私が登録されます」

俺の名前が無かったのは気のせいか？

「俺は？」

「あつ、えへと。忘れてなんていませんでしたですよ。」

おもこつせり田え泳こぐるナビな。

「まへ。嘘をつくな」の口か？」

リザの頬を掴んで引っ張つてやる。

「ひはひへふ。（痛いです） ひやへへふまほひ～（やめてください～）」

ふはははは。手をじたばたさせても無駄なのだよ。
こんな風に仲睦まじく？ 戯れている時だった。

『ツカサだ！ ツカサが来たぞ！』

街中にけたたましく警鐘が鳴り響いた。

「何？ ツカサじゃと…」

ツカサ君？ 誰？

そんな疑問をよそに一番先に動いたのはデルフだった。

「ええい、何故このような所に。」

言つが早いが、デルフの身体が光に包まれて消えた。
おそらく転移魔法だろう。

尋常では無いデルフの様子からして、ヤバイもの何だらう。

「ツカサってなんだ？！」

思わずシャルに問い詰める。

「落ち着いて下さい。ツカサとはお察しの通り魔物です。それもおそらく5本の指に入る程の。俗称を長虫ツカサと言つて」

長虫？ 虫か？！

だとしたらデルフに鬪えるはずがない。

あのバカ！ 無理しやがつて。

俺は傘を握りしめた。使い方はシンプルでエンチャントしたい部分を思い浮かべるだけらしい。

先ず足を思い浮かべる。途端に足を淡い青の光が包む。力がみなぎるのを確認しながら俺はデルフが行つたであろう方向へ走りだした。

「あっ、ちょっとヒカル！　まだ話は終わってませんよつてもう行つてしましましたか……」

空を仰いで嘆息するシャルだった。

走る。走る。走る。

スゴイな……。身体が軽い。

遠くではおそらくデルフが使った魔術のせいであろう爆発が連續的におこっている。

デルフが闘う意志を失つていないことを確認してまた脚に力をこめる。

あと少しだ。爆発による砂煙がちかくなつてくる。
気付けば街から大分離れている。ここならば街に被害はない。
そう考える少し安心出来たのだった。

いた。デルフだ。

そしてデルフが相対しているの方を見る。

取り巻いていた砂嵐もクリアになつてきて姿が見えてきた。

なんかデ力過ぎねえ？

見えてきたのは、10メートルはあらうかといつて四体。首は長く、
そのさきの顔は爬虫類のようで獣猛そうな感じが見てとれる。

身体は見るからに固そうな鱗で覆われていて大樹のような四肢に
支えられつい。

明らかに虫ではなかつた。というかドラゴンって言つたじやねえ？

「だつじアリゴンドすもの」

気がつけば隣にはシャルトリーザがいた。

転移魔法で飛んできたのだろう。

色々言いたい事はあるんだが……一つだけまず言わせてくれ。

「うわおおおおおおんー。」

10本目 バカではなくて素直と言つて！

「これをどうしろって？」

目の前には明らかにサイズがおかしいドラゴン様とその顔面におもっこそ爆発をプレゼントなさっている魔王様のお姿。

いや、ホントにデカいよ？ 例えるならデストロ ガン ムとストイクフーダム位の差だな。
なんでガン ムかって？ 僕が好きなだけです、ハイ。

そんな現実逃避をしている間にも爆発がつづいている。

わあ、なんて素敵なお景しだらつか。素敵過ぎて胃の辺りから酸っぱいものがでてくる。

はあ……なんだかなあ。

傘強くなつたからつて調子こきましたね。俺。

今は反省している。

「デルフのサポートをしてきます」

シャルが戦闘に加わるつとして、それにつられてリザも

「そうですね。助太刀するです」

肩をぐるぐる回している。準備運動だらつか。
やる気満々みたいですね。

……OK、OK。

名残惜しいがそろそろ現実逃避からリターンしないと隣の一人が俺を置いてドラゴンさんの所に乗り込むじゃないですね。

はあ、とため息をついて傘を握り部分的に力を流していく。最初は腕、胴、そして脚へ。流れ込む力が安息感を与えてくれる。よし、悪くない。

いらっしゃへタレと言われようが女の子だけに鬪にはさせられないよな。

「あー……一人とも。俺が先に行くから」

任せろって言えない自分が辛いね。

とりあえずできるだけ恰好をつけたセリフを言って、俺はデルフのもとへ駆け出した。

「突っ込めってバカかテメエは…」

「大丈夫じゃ。ふおろ~はちやんとする?」

「フォローすら発音できねえ奴を信じられるか! しかもまた疑問形かよ…」

「It is pity that You are chicken (あなたがチキンで残念です)」

「だあつ! 英語でしゃべんな! 何て言つてんのかわかんねえよ!」

「あなたは最高です。
といったのじゃ。お主が頼りなのじゃ。」

なんということだらう。 最高なんて生まれて初めて言われたよ
! かーちゃん!
えと、いといずぴていぞつ……ん? 何だっけ。
まあいいや。たぶん『ぴつい』つてのが最高つて意味だらう。 そう俺の勘が言つてしる!

「ふつ、安心したまえ。この俺の『ぴつい』な闘いに酔いな!」
最高に『ぴつい』な笑顔を浮かべて、俺はドラゴンに向かつて特攻を決めるべく走り出したのだった。

「はあ、アヤツは『pretty(残念な)』の意味を知つてあるのかのう……。まあ、扱いやすいから良いのじゃが。」

一人、少し罪悪感に駆られた魔王がいたとかいないとか……。

1-1 本目 本氣出すか……って多分死亡フラグ

「いいいやつほおおおー！」

今の俺、最高！ ザ・ピーピー？ あれ？ なんだっけ？

.....。

ま、まあ俺は最高な訳だから？ 例え俺が俺を表す言葉を忘れたとしても、それはただ単にその言語が俺を表すほどの言葉をもつてないだけだ！ 覚える価値も無いくらいしか俺の魅力を表してないだけだ！

つまり言葉が俺に追いついてないだけなのだ！ うん、そうに違いない。

おい、そこのお前。

追いついてないのは俺の頭だとか思つたろ？

ふふ、ふん！ ま、まあ俺は寛大だからな。気にしないさー 気にしてないんだからな！ ホントだからー！

「つーわけで……死ねやこのトカゲやろおおおー！」 取り敢えず俺の精神安定の糧となりやがれ。

脚に魔力を込めて跳躍。10メートルなんて高さなんのその。

「あーいきやーんふらーい！」

ツカラサの頭と同じ高さでなおかつ一メートル位離れた所に突如、

黒い足場が現れる。

おそらくデルフの仕業だらう。いー仕事してますね。
そして着地。

そのまま着地の勢いを殺さないようスイングを開始する。

「オルアアア！ 吹つ飛べやああ！」

周りの空氣を巻き込みながら傘がツカサの顔面にめり込む。
そして次の瞬間ツカサの顔が高速で視界からフェードアウトする。
やべえ、超気持ち良い……。

そう、それは俺がこっちの世界に飛ばされる一ヶ月の朝。いつも
のように俺を走って迎えに来たダニエルが4tトラックに撥ねられた時
のような爽快感だった。

「の、わっつ！」

ツカサの尻尾の先端が鼻先を掠める。

あっふね！ 鼻とれるこだつた。

なんてヤツだ。全く効いてないみたいっすね？ なにその「うわ
ー、寝違えたあ。首いてえ」みたいな顔。

いやドラゴンが寝違えるのかどうかしらんけど。
しようがない。本気を出しますか。

身体の力をぬき、倒れるようにツカサの元へ足場から飛び降りる。
足場から足が離れる瞬間、魔力を込めた足で身体に回転を加える。
トリプルアクセルのごとく回転。まあトリプルではないけれど。
ありえない程の遠心力に傘を持つて行かれないように腕に魔力を
込めてしっかりと握りしめる。

「力あああサコブタああ！」

高瀬流傘術、秘奥が一 カサコプター。この技は、ありえない脚力を使って身体を回転させ、傘に付いているフリフリで相手をスライサーにかけたキャベツのように引きちぎるというキューティーかつ残酷な技なのだ！

ちなみに使つた後三日間は、強すぎる遠心力が「ぢゃませにした三半器官のせいで立てなくなるのだが……。

そういう訳で突進中なのだが、何故か避けるでもなくツカサガ口を開ける。

その口にはほのかな明かりが灯る。

あー。これはもしかしなくても……。

奴の口の中の光は消えるはずもなく、むしろ日に見えて大きさを増していく。

収束する光球。近づくごとに増す熱気が肌を焼く。焼き肉の気持ちが分かつた気がする。

まあ、これは死んだな。

辞世の句「カサコプター 走りだしたら 止まれない」

むしゃくしゃしてやつたが今は反省している。

そして俺の意識は火球に飲み込まれた所で途切れた。

12本目 理不尽つて多分氣のもあむ。……だといいな

「…………… もい」

あれ、なんだ?

「…………きなさい」

確か俺、ツカサと戦つて火の玉に飲み込まれて……
起きなさいと言つているのがわからないのかしら?」

なんか聞こえるね? なんか前にも「んなことがあつた気がする。
そう思いながら目を開ける。

目の前にいたのは、ゴスロリチックな服を着た金髪美少女。だが、
確かに美少女なのだが特筆して言つものがないという良くわからな
い顔立ちをしている。

「なんだ? お前?」

「私? 私は女神よ?」

「うわ。出たよ自称。しかも今度は女神だつてよ。この世界は
自称がブームなのかね。」

「取り敢えず、その哀れんだ視線はやめて頂戴。不快だわ。」

「不快だわ。だつてさ。ああ、もうあれだね? 成り切つちゃつて
るね。こんな年からこんな人格なんて可哀相に。」

「やめて頂戴と言つたのが分からぬのかしら?」

「うひ、ぬおー！」

気付けば喉元……ところづか俺の周りに抜き身の剣が取り囲むかのよひに浮かんで、もとい突き付けられていた。

「す、すみません」

「ううで謝つてしまふ俺はきっとヘタレなのだひつ。

「分かれば良いわ。ただ、氣をつけなさい。言つた事をもう一度言うのは嫌いだわ」

「ヒルウエード、お前誰だ？　てかヒルゼーヴィーだ？」

はあ。とため息をつく自称女神様。

「貴方はお馬鹿さんなのかしら。まあいいわ。お馬鹿さんにも分かるように説明してあげましょひ」

「馬鹿つていうなー」

「まあわつかもも言つたように私は女神、名をタチバナ

「スルーかよ！　つかタチバナってなんだよー　なんで金髪なのに日本より？！」

「うぬそこお馬鹿さんね。死ないとわからないのかしらー。いつ死んでみる？」

やつこつてまた剣を召喚するタチバナ。

「すみません」

きつといいで謝つてしまふ俺はへタレだ。分かつてゐから言わなければ? 国むから。

「まあいいわ。簡潔に言つと、力を得た貴方は図に乗つて無謀にもドラゴン相手に特攻。そして返り討ちに会つて肉体は瀕死。意識だけを奪である私の中に引き込んで今に至るといつゝよ。全く、本当にお馬鹿さんね」

「ええ? 女神じやねえじやん!」

「私は率の女神、もつと詳しく述べれば選定を司る女神といつゝつかしら」

「選定つて、まさか率つてお前のせいだつたのか?」

「やうよ。なかなか愉快だつたわ」

ふふつ。ヒ上品に笑つてセ貴族。

「いの愉快犯が」

「面白こことを言つたつもり? センスが無いわ。お馬鹿さん

「バカつて言わないでくださいー。」

もう半泣きだよー。

「んで、俺瀬死なんじゃん？　どうすりゃいいんだ？」

「そのために呼んだの。多少遊び心が入ったとはいえ私の使用者だもの。死なれてしまうのは気持ちの良いものではないわ」

じゃあ傘なんて渡さないで欲しい。

「とこづわけだから力をあげるわ」

「マジで？！　えらい簡単にくれるんだな」

実は結構いいやつなのかも知れない。

「ただ一回発動する」といめまい、吐き気、左手薬指の爪が異様に早く伸びる、運命の赤い糸が切れるのどれかが無作為に起きるから氣をつけろ」とね

「なんだよ、そのロシアンルーレットみたいな罰ゲーム

怒る氣にもならん。というか何から怒つていいのか。

「ちなみに副作用は私のせいではないわ。そもそも行きなさい。私の名前を念じれば発動できるから。私はもう寝るわ。少し話すぎたもの」

ふわあと欠伸をしてあっちへ行けの手振りをするタチバナ。

「おこちよつと待てー!話はまだ」

言い切らない内に目の前が白くなる。「健闘をいのるわ」という声を聞いた気がした後、俺の意識は完全にホワイトアウトした。

13本目 格好良いと強いはイコールではない……多分。

「……ん、んあ？」

ぼんやりと目を開ける。 定まらない視界に目をこする。

「起きたんですか？！」

「大丈夫？！ お兄ちゃん！」

近くでする悲鳴にも似た声に意識が覚醒する。

「おお、俺生きてる」

そう言ひながら身体を起こさうとする

「ヒカル！！」

「お兄ちゃん！！」

「おうふつ！」

てな具合にラガーマン並みのタックルをみまつてくれるお一人。

「お、まえりなあ！ 死ぬだろ？がー！」

「きやつ」

「きやあ

ペいつ！ と二人を投げ出して立ち上がる。

「何しやがるー！」

半ばぶちギレ気味の俺。

いやだつて、あり得ないでしょ？

じいにひらドリゴン相手に立ち向かおうとする奴らよ？

せつ

かく生き返ったのにタックルで死亡とか。爆笑ってか失笑？

いや本当に痛いの。もおね、わっさから身体の中の何かがごとめどなく溢れそうなくらい。

「「」みんなさーいです。でも、お兄ちゃんが死んじゃったかと思つたら……思つたら……えぐつ、ひぐつ」

途端泣き出すリザ。

「あ、いや、わ、悪かつた」

いや、そんなふうに泣かれちゃつたら、お兄ちゃんもおひれませんよ？

「「」みんな、ありがと」

慰めるよひにリザの頭を撫でてやると、ふに、と柔らかい表情を浮かべるリザ。

かんわいいなあと、和んでいると不意にゾクシとあるような悪寒が走つた。

「へえ、リザにはそうで私は無視ですか。そうですか。こんなに、こんなに心配したのにリザには膝枕で頭なでなで、私はスルーですか。私だつて、私だつて」

「あのー、シャルさん？」「どうしてくれましょ。いつそサクッと殺つてしまいましょうか。ふふふ、ふふ」

にやり、としながらぶつぶつと独り言を呟くシャル。

怖いよー、怖いよー！

「さあ、ヒカル。」ちらりちらりしゃい？」

シャルさん！　あなた性格かわってますよ？！」

「ふふふ、ふふ」

ちらつ、ちらつと近づいてくるシャル。

「いや待て！　わかった！　膝枕でもなんでもしてやるから！
とりあえず、あのばかでかいトカゲぶつ飛ばしてから、な？
な！」「う、本当ですね！」

何か尋常じやない食い付きを見せてますね。

「あ、ああ」

「分かりました。では覚悟をしていてくださいね？」それでどう
やって倒すんですか？　さつきみたいなのではまたおなじですよ
？」「……変わり身早いな。ん、まあいいや。見ててくれ」

そういうて、傘をもつて立ち上がる。不思議そうに小首を傾げ
る一人を余所に俺はタチバナの名を心で叫んだ。

瞬間、俺を光が包む。そして目が眩むような光が消え去った後
の俺を見て、二人が、いや俺を含めた三人の目が丸くなる。

俺の腕には白いフリフリの着いた黒地の袖。

下半身には何重にもなったフリフリの黒地のスカート。
黒くフリフリの着いた傘を携えて。

おれは、そり、あのタチバナのよつな、フリフリ、ゴスロリの今
をときめくメイドちゃんになっていたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0296m/>

傘で始める魔物退治

2011年3月20日09時23分発行